



# 神聖かまってちゃんと市川左團次

仲間を求める絶望

《 ボンクラの心情を写しきったような名曲／タイアップの仕事がなくなってしまうバンドファンとしては実はうれしい／左團次は正直に不満を書いている／“神聖かまってちゃん”はロマンを描き始めた／山口百恵る／「仲間を探したい」／／／ロックって何／ 》

神聖かまってちゃんと市川左團次（歌舞伎） ———仲間をさがすが絶望もしてる

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！  
これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。  
音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、  
20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。  
今回は、「市川左團次（歌舞伎）」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

ずっと生きているのに恋愛もなければ愛してくれる人も見つからないことは十分にありえることだよ

これは『スミス』のモリッシーの言葉である。

これをみんなどういうふうにとるのだろう。一見、絶望的にも思えるその言葉を雑誌で見たとき、じつは高揚感をおぼえた。

ロックを好きになってJAPANをシコシコ読んでるようなボンクラは、孤独に打ちのめされているはずだ。自分はきっと誰からも愛されることはないだとか、そんな資格はないだとか、思っている。でも誰かが自分のことを分かってくれるはずなんだと希望をもっている。だからこそ絶望しているのだ。誰も現れず、そんな兆しもないからだ。そんな我々、ボンクラにこのモリッシーの言葉は最高だった。人生生きてて自分のこと肯定してくれる人が現れないことってあることなんだな、と教えてくれるからだ。



例えば、谷村新司が↓

例えば、谷村新司が山口百恵に提供した楽曲「いい日旅立ち」（一九七八年）という曲がある。そのなかでこう歌われる。

《過ぎ去りし日々の夢を叫ぶ時／帰らぬ人達熱い胸をよぎる／  
せめて今日から一人きり旅に出る／あゝ日本のどこかに／私を待  
ってる人がいる》

主人公の周りの人間はどんどん離れていき、独りきりになっている。↓

《過ぎ去りし日々の夢を叫ぶ時／帰らぬ人達熱い胸をよぎる／せめて今日から一人きり旅に出る  
／あゝ日本のどこかに／私を待ってる人がいる》

主人公の周りの人間はどんどん離れていき、独りきりになっている。旅に出て何かを探そうとするようすが描かれる。主人公は、絶望はしているが希望を失いきっていない。だが、絶望につつまれているという辛い状態だ。まさに、ボンクラの心情を写しきったような名曲である。

それに似たような曲が神聖かまってちゃんにある。「仲間を探したい」だ。↓

それに似たような曲が神聖かまってちゃんにある。「仲間を探したい」だ。彼らの曲の場合は、自分で作り、自分たちで歌うので、曲提供とちがって、その意味あいはこの子のパーソナルの部分と密接にからむこととなる。例えば、最初の歌詞はこうだ。

夕方には僕も終わりだ  
クレヨンももう書けないのに  
ブランコにゆらりゆられる

君が今となりにいるよ



↓



夕方には僕も終わりだ  
クレヨンももう書けないのに  
ブランコにゆらりゆられる  
君が今となりにいるよ

この主人公は自分自身に対して少しあきらめている。自分の無限の力に憧れることが出来ないという悲愴感だ。ブランコというのは、自分の立っているところが非常に不安定なことを表している。それは精神の不安定さでもある。神聖かまってちゃんはデビューから怒涛のごとく事件をまきおこして、それが毎回ナタリーニュースになっていた。さらに、テレビアニメ『電波女と青春男』の主題曲を作り、ロックシーン以外のアニメ界隈でもその名前は知られるようになる。彼らはここまで上り調子だった。しかし、

その後、タイアップの仕事がなくなってしまう。

これはバンドファンとしては実はうれしい。なぜなら、へたにタイアップされるとロック界隈としてはクソくえだからだ。↓

しかし、そこから神聖かまってちゃんはロックシーンの浮いたトピックスではなくなっていく

。

この時期から、入れ替わるようにして、同世代のバンドが次々とマスメディアに出て行くことになる。ゴールデンボンバーはお祭りバンドとして音楽番組のSP放送に呼ばれていった。サカナクションはタイアップとTV出演で、独自の存在感を示していった。SEKAI NO OWARIはルックスの良さとキャッチーな曲でTV出演をし始めた。従来のロックバンドらしい真っ当な活動をおこなった結果、神聖かまってちゃんはニュース的なトピックがなくなっていった。ふつうはそういうものだと思うが、彼らの楽曲は最高に良いものの、デビュー当時から事件性とともになくなっていったというルーツがあったので、アルバムを出してライブがひと段落していったときファンはその後彼らに目立ったニュースがなかったとき妙にざわざわした気持ちになった。

マスメディアに↓

マスメディアに出て行ったバンドは何かを引き受けたということだろう。二代目 市川左團次という歌舞伎役者が、表現と興業についてエッセイで語っている。

「興業主の方にしてみれば、俳優の研究欲や芸術的希望ばかりを聞いているわけにはいきません。当人はたびたびで気がさしてようが、またあれかと古くなっていようが(略) 看客の入りがありそうなものだとなれば、どうしてもその狂言を撰定するようになるわけです。」

表現を興業とする者は音楽や芝居という違いはあるもののみんな同じだということが分かる話である。マスメディアに上がっていった神聖かまってちゃんの同世代のバンドたちはきっと、興業という責任を背負ったのだろう。それは彼らにはやるべき使命のようなことを実行するためだ。

例えば、サカナクションは紅白歌合戦のコメントで、「日本のバンドを背負っているつもり」といっている。ロックバンドが、お茶の間にアイドルとはちがう、二一世紀に受けるような音楽を世間に流すことを使命と思っているという山口一郎のインタビュー読んだことがある。ゴールデンボンバーは、アンチテーゼだったお笑い芸人が体制側についてドン詰まっていたマスメディアに、そのアンチテーゼという形で、どんどんお笑い芸をしていく。

SEKAI NO OWARIはバンドというていをとって、演出に工夫をこらすことでエンターテインメントを人に提供していく。それらには、市川左團次がいう、やりたくないことをやっているのだろう。

左團次は正直に不満を書いている。↓

「気に入らない狂言のときの、それからの長さというものはお話にならないくらいで、つまり検体を覚えるのです。マダ千秋楽にならないかな。マダあと幾日あるなどと、その長いこと長いこと」

さらにこう続けている。



「それに引かえて、自分でも最初から気乗りしている役になると、毎日毎日、アアでもない、コウでもない、それからそれへ研究欲も出て、興味はますます加わるばかり、イヤ正直なものですよ」

神聖かまってちゃんはいまどちらの心境なのだろうか。彼らはタイアップに関してつっぱねてはいない。むしろ、彼らはタイアップが欲しいとっている。それは彼らがいまの現状に満足していないということだろう。メジャーという世界が崩壊して、もはや世界はビックマイナーとトリプルメジャーしか存在できなくなった現在、ロック界限ではタイアップは魂を売る諸行といわれていたが、今は逆にそれが自分たちをアピールする真っ当な方法になった。これは不思議な現象だ。

ロックバンドというものにロマンがなくなってしまった現代からこそ、ロマンがいつそう強く輝いているのだ。神聖かまってちゃんはいまそれに手をかざしている状態だ。つい、先日、この一年のバンドの公約をかかげた（最近、こういうの流行ってる？）。展開がないと動いてないような印象になるからだろう。

彼らの楽曲「仲間を探したい」の歌詞はこうなっている。↓



《君とこうやってブランコ二人きりの風景とかさ／あの夏休みが  
終わっても／続くのかなあ／仲間を探したい／別れるだけじゃ  
ない》

「夏休み」というワードは昔から彼らの楽曲によくでてくる。その言葉の意味するものは、真つ当なレールに乗り切れないで、取り残されている者ということだ。音楽評論家ふうにいえばモラトリアムである。彼ら（の子）はひきこもりやニートという印象だ。

つまり、夏休みとは彼ら神聖かまってちゃんの象徴である。そして、「君」というのはリスナーだろう。《あの夏休みが終わっても／続くのかなあ》は、の子は、神聖かまってちゃんが終わったときいままのリスナーはどうなるのかという不安を吐露しているようにみえる。ここでの“終わる”というのは、解散かもしれない（の子はソロでライブをおこなったとき、ファンのあいだで解散説がとびかった）が、わたしは今いるポジションからべつの場所に行くということだろうと思う。同世代のバンドたちがいったマスメディアの世界、つまりメジャー（お茶の間）である。

↓



そして、サビの《仲間を探したい》からは、サブカルチャーからサブカルチャーそのものになりたいという意志がここから読みとることができる。

一〇年後いちばん評価されるのは、どのバンドよりも神聖かまってちゃんであることは分かっているが、いまという活動期に評価されてほしい。それがロックバンドがやるべき使命だし、ロマンだ。彼らはそれに自覚的である。

だからこそ、神聖かまってちゃんから目を離したらいけないと思っている。彼らは、われわれボンクラの夢だからだ。↓

うおお←